福井市立郷土歴史博物館
FUKUI City History Museum
展示解説シート　No.151

令和４年夏季特別陳列①

関東の名族　結城氏と福井

●会　場／2階企画展示室
●会　期／令和4年7月23日(土)
～8月28日(日)
※会期中の休館日はなし。

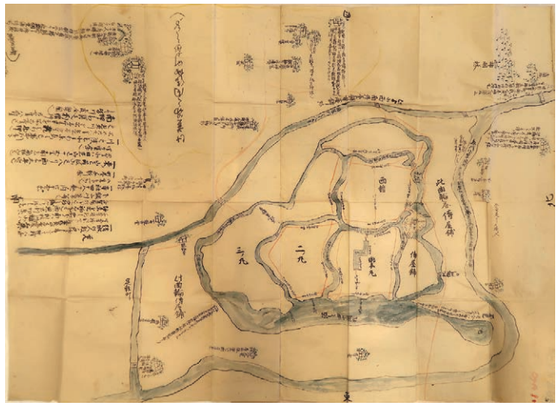
福井藩祖・結城秀康は、江戸幕府を開いた徳川家康の2男です。加えて源頼朝の側近・結城朝光(ともみつ)にはじまり、下総(しもうさ)国結城（現在の茨城県結城市）を本拠とした名族・結城氏の継承者でもありました。関ヶ原の戦いの後、秀康が越前国を拝領すると、結城氏の家臣団やゆかりのある寺院などが関東から越前に移住・分立しています。このような結城秀康を通した歴史的繋がりをきっかけとして、福井市と結城市は長年にわたる交流が行われており、平成14年（2002）に友好都市となりました。

本展では、福井市と結城市の友好都市提携20周年を記念し、福井藩と結城氏との関わりを示す資料を中心にご紹介します。

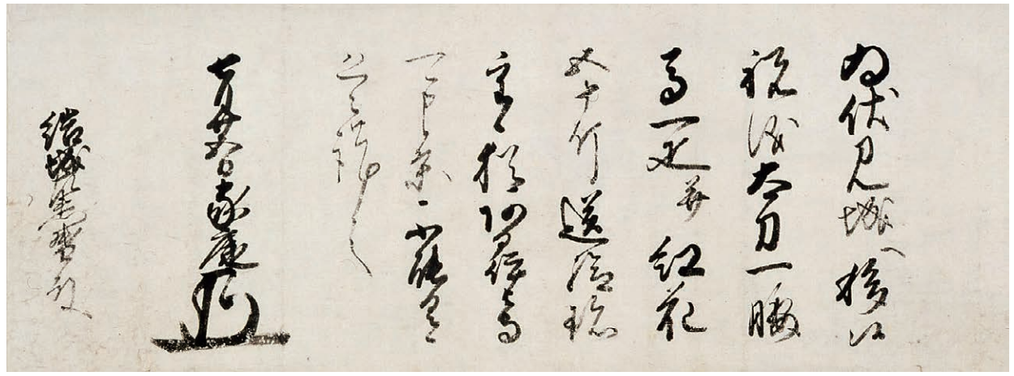
第１章　鎌倉時代からの名族　結城氏

結城氏は、平将門を倒した武人の一人・藤原秀郷(ひでさと)を祖先にもつ下野(しもつけ)国（現在の栃木県）の豪族・小山政光の3男・朝光が、源頼朝から下総国結城を与えられ、本領としたことに始まる関東屈指の名族です。朝光は、母の寒河尼(さむかわのあま)が源頼朝の乳母であった関係から、頼朝の烏帽子子(えぼしご)（実際の子に準ずるものとされました）となり、その側近として厚く信任されました。

朝光以後、結城氏は時に衰退、また再興しながらも関東の名族として続きました。戦国から安土桃山時代にかけての当主・結城晴朝(はるとも)は、天正18年（1590）に豊臣秀吉の養子である秀康（徳川家康の2男）を養子に迎えました。



▲結城御城之図（松平文庫、福井県文書館保管）
※室町時代以降の結城氏の居城を描いた絵図



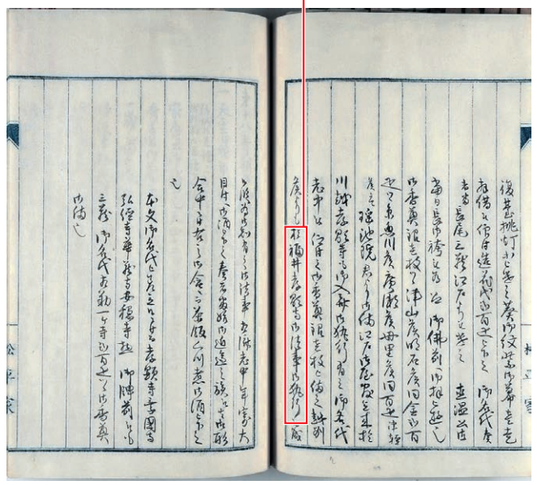
▲（慶長四年）七月二十五日付結城晴朝宛徳川家康書状（越葵文庫、当館保管）
※結城晴朝から太刀などを贈られたことへの礼状

第５章　結城氏から越前松平家へ～記憶される由緒～

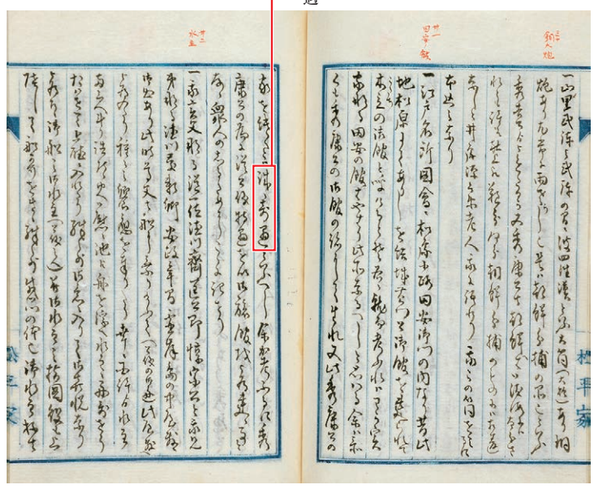
結城秀康の越前転封後、彼が徳川家康の実子であったことから結城氏は親藩・越前松平家となります。名乗りを変えた時期については諸説あり明確ではありませんが、秀康の跡を継いだ忠直のころには徳川一門であることを示す松平の名字を名乗ったとみられます。こうした動きに伴い、結城の家名は秀康の5男である五郎八（直基(なおもと)）が継承しましたが、まもなく直基も松平に復姓しました。こうして、結城の名字を名乗る大名家はなくなりました。

しかし、かつて結城氏であったという由緒は越前家と呼ばれた秀康の子孫の大名家に記憶されつづけました。その中心となったのは直基の子孫である前橋松平家でしたが、福井藩主・越前松平家も江戸時代中期ごろから結城氏ゆかりの神社に家臣を代参させるなど独自の活動を行っており、結城氏についての歴史書の編纂なども行っています。

また、幕末の明君として有名な16代福井藩主・松平春嶽（慶永）は藩祖である秀康に関心を抱いており、春嶽が藩主であった天保14年（1843）に福井藩士・松平源太郎（明治期に熊本県知事などを歴任した松平正直の父）が秀康の事績調査に携わるなどしています。



▲結城御代記（松平文庫、福井県文書館保管）
※江戸時代後期の結城晴朝二百回忌には
福井孝顕寺でも法事が行われた。



▲眞雪草紙（福井市春嶽公記念文庫、当館蔵）
※松平春嶽は生家である田安徳川家の館が結城秀康の館跡に建てられたと考え、
自らが秀康の館跡で生まれ、その子孫の家を継承したことを「誠ニ奇遇」と述べる。

主な参考文献

『シリーズ・中世関東武士の研究　第八巻　下総結城氏』荒川善夫 編著、戎光祥出版、2012
『福井市史　通史編2　近世』福井市、2008
『結城市史　第五巻　近世通史編』結城市、1983
『結城市史　第四巻　古代中世通史編』結城市、1980

●次回の展示
秋季特別展「寿ぎのきもの　ジャパニーズ・ウェディング」　令和４年10月８日（土）～11月23日（水・祝）

福井市立郷土歴史博物館
〒910-0004 福井市宝永3丁目12-1
電話 0776-21-0489　FAX 0776-21-1489
「展示解説シート　No.151」　令和4年7月23日発行
担当／中西 健太・山田 裕輝　　印刷／小川印刷(株)

第２章　福井藩祖　結城秀康

▲銅造結城秀康小像（越葵文庫、当館保管）
※本多重次に抱きかかえられた結城秀康

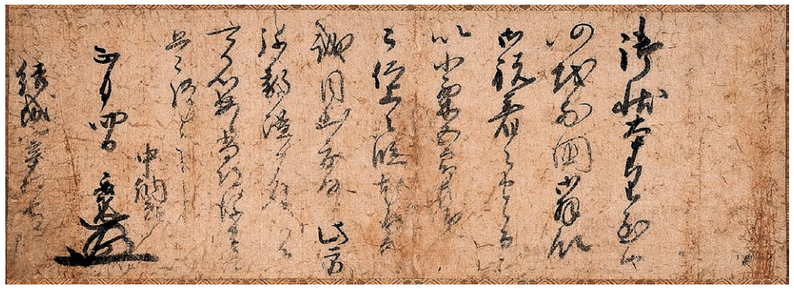
福井藩祖・結城秀康は天正2年（1574）、徳川家康の2男として生まれ、家康の重臣である本多重次（しげつぐ）が養育に関わりました。天正12年、小牧・長久手の戦いの講和に際して羽柴（のち豊臣）秀吉の養子となり、やがて元服して秀吉の「秀」と家康の「康」の字をもらい受けて羽柴秀康と名乗りました。天正18年、秀康は結城晴朝の養子となり、下総国結城を相続しました。秀康の宛行（あてがい）状は当初から村名に付ける肩書を郡名でなく「～領」としているのが一つの特徴で、越前国においても2代藩主松平忠直まで引き継がれました。

慶長5年（1600）、秀康は実父家康の会津攻めに従い、下野国宇都宮で上杉景勝の南下を防ぎました。関ヶ原の戦いの後、論功行賞により秀康は越前国を拝領し、慶長6年には北庄城（きたのしょう）（のちの福井城）の再建に着手（慶長11年にほぼ完成）。慶長12年、北庄にて死去しました。はじめ秀康は結城家の菩提寺である孝顕寺（曹洞宗）に葬られましたが、徳川一門は浄土宗であるべしとの家康の意向により、新たに浄光院（のちの運正寺）が建立され、改葬されました。

第３章　結城氏と福井

結城秀康の越前入国とともに、彼に従ってきた家臣団には北庄（福井市中心部）で屋敷を与えられました。また、結城からは職人を含めた町人や寺社も移住・分立してきました。このように結城から来たものを「結城引越し」といいます。結城引越しの寺社は約20ヵ寺が確認されますが、そのほとんどは結城氏に関係の深い寺院です。

秀康の越前入国にともない、養父結城晴朝も現在の福井市域にやってきました。福井市片粕（かたかす）町には晴朝の館跡とされる場所があり、福井市指定史跡となっています。また、福井市の中心市街地にも晴朝の足跡が残されています。松平忠直のころの北庄城の城下を描いたとされる絵図には、城の主要部から百間堀をはさんで対岸に「晴朝様」と書かれた大きな区画が描かれています。当時、この区画に晴朝の屋敷が建っていたものとみられます。晴朝が亡くなると、その屋敷跡は分割されて家臣の屋敷地となっていきます。しかし、「晴朝の屋敷があった」という記憶は後世まで残り続けました。絵図に目を戻すと、晴朝屋敷の近くに百間堀を渡る橋があり、その先の城の中心部側に黒く太い線が鍵の手状に曲がっている箇所がみられます。ここには漆門という城門があり、「鳩（はと）の門」とも呼ばれていました。一説には、近くに晴朝の屋敷があったため「はるとも門」と呼ばれていたものが「鳩の門」になったのではないかといわれます。



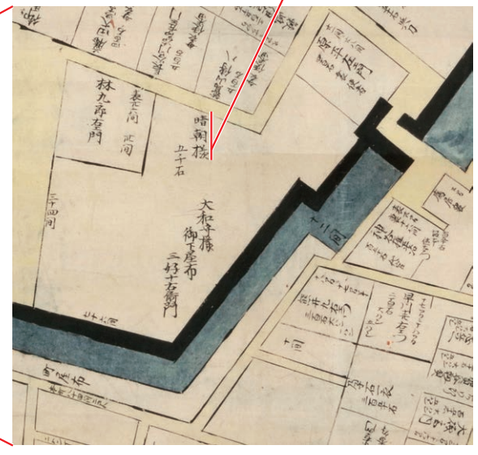
▲（慶長六年）正月四日付結城秀康宛徳川秀忠書状（越葵文庫、当館保管）
※兄である結城秀康の越前国拝領を大変喜んだ　　徳川秀忠が出した書状

第４章　福井にやってきた結城家臣たち

結城秀康が越前国に転封すると、多くの結城氏ゆかりの家臣が越前に移住してきました。江戸時代には多賀谷（たがや）家、山川家、水谷（みずのや）家、岩上家の四家が結城氏の代表的な家臣として知られていました。岩上家を除く三家は戦国時代には自立性が強く、結城氏の家臣というより同盟相手に近い存在でした。しかし、豊臣秀吉の養子であり徳川家康の実子という経歴を持つ秀康が結城氏を継承したことにより、水谷家は独立した大名となったものの（庶流は秀康に仕えました）、多賀谷・山川両家については徐々に家臣化していきました。秀康の越前転封後には、多賀谷三経（みつつね）が3万2000石、山川朝貞（ともさだ）が1万7000石と大名並みの石高を与えられています。慶長20年（元和元年・1615）の大坂夏の陣では多賀谷隊が38、山川隊が18の首級を挙げるなど活躍しました。

▲金小札紺糸威二枚胴具足（個人蔵、当館保管）
※多賀谷家に伝来したもの

▲慶長年中北ノ庄城下絵図（越葵文庫、当館保管）
※忠直期の北庄城下を描いたとされる絵図



▲結城晴朝の屋敷
※現在の福井駅南側